



発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第六十七号（一日発行）  
平成七年四月一日

# 北海の古平風土物語

十古平祭と『臆下丹田（せいかにん）』

「気△口術極意者」の海田君（一）

十古平祭（琴平神社例祭）

高橋源 五口

このころ古平町の郷社・琴平神社のお祭りは、毎年七月九日の宵宮祭から三日間盛大に行われていた。

毎年のように、春の鯨漁は五万石前後の漁獲が続いていた大漁時代のことで、鯨場切り上げ後のお祭りはなかなか盛大で、賑やかさは北海道内でも評判の高いものだと言っていた。

そんなことで、このお祭りに余市・美国・積丹方面をはじめ、小樽・札幌方面からのお客さん見物人もずいぶんと来ていたのである。

町の通りには大きな幟（のぼり）が立ち並び、奉納のご神灯を各町内ではその大きさや明るさを競い、色彩豊かな絵や鯨大漁・町内安全・豊年万作を願って筆太に書き入れ、周りを軒花

で飾りつけた上に、日の丸や海軍旗を掲げた。また、道筋には小型の行灯（あんどん）が立ち並び、大きな漁家や旧家・商家では入口に家紋入りの幕を張りめぐらして、その家の提灯を吊り、全戸が軒先に軒花を飾り、明るく華やかな町に一変するのであった。

各町内から引く大人の山車や子ども用の山車は十車以上にもなった。中には珍しい女だけで引く女山車も加わったり、二頭立てで引く大山車もあった。

泥の木・鴨居木方面から出ず、豊年踊りの一団は特に華やかな姿いでたちであり、賑やかで威勢のよいお祭りの呼び物でもあった。

これらがさほど広くない町中をねり歩く行列は、実に壮観な

ものであった。山車に乗せた人形も、踊りも、引く人たちの服装もそれぞれ違っていたので見あきることがなかった。

神輿行列も立派なもので、元氣な奴、それに続いての天狗は背が高く、一枚歯の高足駄を履き、長く鋭い鉾（ほこ）を突き立てて眼光炯炯（けいけい）、燃えるような朱の装束で神代の時代の、天孫降臨の神話を思い起こす。神輿は浜特有の元氣



## 鯨場の沖揚げ

渡辺ハツエ

[11]

明治・大正から昭和の初期と鯨漁の最盛期が続きました。大漁になると学校も臨時休業になり、子どもたちにもそれぞれ仕事の分担があつて、結構、役にたったものでした。

亡き母は、子どもの寝ているうちに起きて、浜へモッコ背負いの出取りに行ってました。「早く行かないと鑑札がもらえない」というのです。私は薄目を開けて、子どものことを気づかないながら出て行く母の後ろ姿を見ていたものでした。

サンパ舟からモッコを背負つ

な若者たちが担ぎ、その威勢の良さは神輿がどうなることかと心配するほどの勢いであつた。

当時の天狗さんは、同級生であつた故宮本八郎君の長兄であつた。体格も格別で、行事の前のみそぎに厳しい人であつたと聞いている。今も祭礼の神事として天狗の火渡りが行われているが、昔ながらの威厳を残してその伝統を伝えていく。懐かしい思い出である。

て、揺れ動くあゆみ板を渡つて鯨を陸に運ぶのです。子守がおんぶして来る赤ん坊に、仕事の合間をみては浜の石に腰を下ろしてオッパイを飲ませている、母親のほほえましい光景も懐かしく思い出されます。

鯨を陸揚げしているとき、舟の若い衆が親方の見ていないすきにときどき鯨を海に投げつけてくれるのを、かぎを持った男の子たちがそれを待っていて鯨を拾い、手籠がいっぱいになるとニコニコして帰って行ったものです。（次ページ三段目へ）

## スキー場の今昔

子どものころは弁天山（厳島神社裏）が唯一のスキー場であった。大正十二、三年ころか、スキー大会があつて、青年の部の入賞者の名前が当時の新聞に出ていた。いまその新聞が手元がないが、港町の野村さん、仲谷昇三さんらの活躍した記事が載っていた。種目はジャンプと大回転か距離だったかは記憶にない。

新地方面では日和山から畚田中さんの畑まで滑っていたが、

## 故郷を想ひ 福井孝平

山川先生のことなどが思い出される。弁天山では毎年学校のスキー大会が行われていたが、下級生だった藤野さんが事故で亡くなられてから、スキー大会もいつのまにか行われなくなつてしまつた。

沢江では前田直四郎さんが自作のスキーで、裏山の段々畑を滑っていた。馬力のある走法で距離の第一人者であり、ヘソのついたスキーを自慢していた。古平町内でのスキーを滑る場

所も昔からずいぶんと移り変わりがあつた。

### ■羽黒山

現古平高校の登り口近くのとこで、近かつたのでよく練習をした。勢い余つて打越さんの馬小屋の屋根まで上がつてしまふこともあり、このころスキー同好会なるものを結成して盛んになつた。当時のメンバーは、信金の川内・越野・古島・入谷・佐藤亮・笹谷さんら、高橋忠雄ちゃん、禅源寺の良ちゃん、学校では近藤・藤森・佐藤・永井先生、それに私などなど。

### ■歌棄の山

いつか羽黒山では物足りなくなつて、現在、スキー場になつている歌棄の山に移つた。大会の度に勝手に木を切つたり草を刈つたりして、あとで山の持ち主にひどく叱られ、警察ざたの一步手前までいった。気が向けば月明かりの晩など練習して、帰りには一気に崖を滑り降りてそのまま川畑さんの店に寄り、パンを食べたりジュースを飲んだことが懐かしい。

（前ページより） 当時の子どもたちは、小さいころから働く喜びを知っていました。一日中働いて、賃金分として鯨が現物支給されますが、それを暗くなつてから提灯（ちようちん）の明かりを頼りにモッコに入れてわが家へ運ぶのです。その鯨は身欠鯨や千数の子に自家加工をして、数十日後になつてようやく現金収入を得るのです。

### ■通称『寺田の坂』

小学校から近いので、町民スキー大会なども行われた。回転と距離、これもずいぶんと寺田さんにご迷惑をかけた。せつかく植えた松を倒したりして申し訳ないことをしてしまつたと思つている。

### ■旧高校の裏山（丸山）

逢見町長のご好意でスキーリフト購入。はじめて能率の良い練習をすることが可能になつたと思つたら、またまた立木の無断伐採で営林署から大目玉をくらひ二年で駄目になつた。丸山は保安林とかであきらめざるを得なかつた。斜面も急で申し分のないスロープだったのにまことに残念。これも例によつて警察ざた一步手前でやれやれ。

忙しかった漁期が終わると、浜の母ちゃんたちは子どもを連れて運動会の買い物します。母親たちにとっては、年に一度の最高の心の安らぎであつたのではないのでしょうか。産業の基盤を支えてくれた鯨場も、昭和の物語となつてしまいました。幻の魚となりてひさしけれ 鯨の群来はいま夢の中

### ■北楯スロープ

せつかくのリフトを遊ばせておくわけにもいかず、皆で相談の結果、北楯の山を借りることにした。古い電柱を買つてきて中木工場から矢板を買い、橋にして、どうか畑をスロープにすることが出来た。松の根っこを利用し、元助役の関川さんの裏を使用させていただいてワイヤーをセットし、何もかもわれわれ仲間の手作業で完成した。お陰で冬季道スポーツ大会では米田のカッコ、押味さんのお嬢さん、越野寿、鈴木、山口桂ちゃんなどの長男、大槻先生のお嬢さんなどが入賞、好成績を挙げたことは今でも忘れられない思い出である。ムチャクチャと言え（次ページ三段目へ）

# 遙かなる故郷の思い出

7

## 四、お化けの話(下)

橘 義 春

その夜豪傑は大工さんの家の  
囲炉裏の横座にでんと座り、持  
参の一生徳利を置いて茶わん酒  
をあおりながら、「さあ来い」  
と幽霊の出でくるのを待ってい  
たがなかなか現れない。そのう  
ちに眠くなってウトウトして気  
がついたら、囲炉裏のそばに大  
工のかみさんの幽霊がペタンと  
座っているではないか！  
「おめだナ。おめのとど(亭主  
はあれからすっかり改心してな  
酒つこもおなご遊びもやめで、  
おらあ悪がったておめの供養し  
てるベサ。見てけれ、おめのと  
どはふとんの中で震えでるでね  
えが。可哀想なごとするもんで  
ねえてば。いいが、あしたから  
来ねえでけれ。わがったべ」  
と、とことん説教したら、かみ  
さんの幽霊は涙をポトリポトリ  
こぼして豪傑に頭を下げると、  
流しの方へすーと歩いて行って  
消えてしまった。

私の祖父も成り行きを心配し  
て寝ずに待っていたが、ふと窓

の方を見ると、かみさんの幽霊  
が歩いて来て、家の前の柳の木  
の下で消えてしまったという。  
この柳の木は一抱えもある老木  
で、中が空洞になっていたそう  
である。祖父もこれがお化けの  
マイホーム？ だったのではな  
いかと、「こつたらもの無いほ  
うがいい」と、翌日、早速塩を  
まいて清め、線香を上げて供養  
してから大鋸で根元からばっさ  
りと伐ってしまった。

幽霊と対決した豪傑も偉い。

またお化けの棲家だといって柳  
の木を伐るのも、あとあとの崇  
り？ など考えたら、とてもじ  
やないが恐ろしくて出来るもん  
じゃない。あえて迷信にチャレ  
ンジした祖父の勇氣と度胸を高  
く評価したい。

ところで、おかみさんの幽霊  
は「おらア豪傑に説教されまし  
まった。それに柳の家つこも無  
くなってしまうたベエ。こつば  
ずかしくて(恥ずかしくて)も  
う出られねエてば……」

ムチャクチャ、よくもまあ頑張  
ったものだとながらあきれか  
えっている。

### ■関口スロープ

北楯スロープも手狭になった  
ことから関口スロープに移るの  
だが、現地を調査した結果段々  
畑の連続で、中段辺りからは雑  
木林がかぶっていて、この伐採  
には費用もかさみとても自力で  
は困難なので、教育委員会の応  
援を得て五十万円ほどの予算を  
いただき、三井屋本間さんの古  
いブルを使って、実費程度のお  
礼をしてどうにか整地をした。  
スロープの上には吉野さんが  
寄贈してくれた出発やぐらを造  
って、小・中・高校にも解放さ  
せようとした。

と言ったとか、言わなかったと  
か——

それから、大工のかみさんの  
幽霊はぱったり出なくなつたそ  
うだ。

この話は、私たち兄弟が祖母  
から聞いた本当にあった話で、  
大工さん、豪傑、祖父の三人が  
かみさんの幽霊を目撃している  
ので、或は『幽霊』が実在して  
いるのかも知れない、と思つた  
りしている。

(東京都小金井市在住)

れ検定も幾度か行われ、いろい  
ろな大会にもずいぶん利用さ  
れた。

### ■旅行村スキー場完成

それから間もなく、われわれ  
の努力も認められついに旅行村  
スキー場が生まれた。道連盟公  
認の古平スキー学校も開校され  
新式の大形圧雪車も、渡辺町長  
が宝くじ事業団とかからタダで  
探して来てくれて感謝にたえな  
い。スキー学校だけで延一万余  
人を超える受講者があり、年年  
余市や積丹町からのスキーヤー  
も増えてきている。大変喜ばし  
いことだと自負し、ささやかで  
も町おこし運動の灯となればと  
期待しているところでもある。

### ●安可睡眠おの丸

- 濱町 花村ひめ子さん
- 雪下 駄 (一足)
- 濱町 高橋 健一さん
- のこ (二丁)
- 湯沸かし (一個)
- 港町 野村 石雄さん
- たんす (一棹)
- 米びつ (一個)
- 行李IIこすり (二合)
- 消し壺 (二個)
- 衣桁IIいこう (一架)
- その他 三点

大正から昭和初期にかけて

# 私の見たにしん場風景

7

竹内 コト

七、——また 春が来て——

年が明けて春——三月ともな

ると、それを待ちかねたようにまた本州から、ヤン衆がやってくる。多くは同じ漁場に毎年来るので顔なじみになり、手土産などを持って来る人もいる。古平では、建場の親方の所だけではなく、刺網を建てている所へも一人、二人とやって来る。

ほとんどが東北といつても、津軽・南部（青森・岩手県）なのでその名物を持って来る。色のついた干し餅・ごま餅・豆餅・鉛鉢・わっぱ鉛など——。干し餅は、つきたての餅を寒い晩に外でしばれさせて干したもので、かじるとパラッとくだける。鉛鉢は叩いて割り、石炭鉛のように食べる。わっぱ鉛は少し火にあぶり、柔らかくしてから割りばしにからんで食べる。子ども心にも、そんなお土産を持って来てくれるおじさんたちの来るのが、その時期になる

ととても楽しみであった。

ヤン衆と言われる人たちは出身地では農家の人たちが多く、鯉場が終わって帰るとちよほど田植えに間に合う。家に残った人たちが、田を耕し苗代をつくら一家の働き手を待っている

## 【△7日はこんな日】

### 健康を守る『国保』制度が発足

【昭和35年】

医療が身近なものになる

昔から、健康を守る医療費は住民にとって大きな負担でしたが、昭和三十四年に新しく国民健康保険制度（国保）ができ、国民のすべてがこれに加入しなければならなくなりました。

その運営は各市町村が行い、住民が所得に応じて保険料を納めるといふもので、現在の『国保』が、古平町では同三十五年四月一日から始まりまし

のであるが、中には村会議員だという人もいた。鯉場への出稼ぎは、農家にとっては秋までの貴重な現金収入であるばかりでなく、賃金の前借りはお正月を迎える一家の資金でもあった。全額前借りをして、切り上げに賃金を貰えない人もいた。

漁場ではふだん歌をうたうようなことはないが、ひとりのある若い人がよくうたっていた。後で、それは当時流行の『国境の町』という曲だということを知った。その人は、国では大工さんだったという。

国民健康保険運営協議会委員

・公益側代表 岩間 与一

大沢 雋 津田 精

・医療側代表 蓮実 豊光

渡辺 高幸 鈴木 トク

・被保険者代表 幸村重一郎

福井 幸平 渡辺 三郎

れました。

初年度の国保関係予算は七百七十九万二千六百四十六円でしたが、予定より受診者が多かったことや、保険料の納入率が八十六%と悪かったことなどから初年度から赤字を出してしまいました。当時の保険料は一人平均九百七十七円でしたが、この年値上げになった入浴料は大人十七円という時代でした。

保険料の予算額は、昭和三十六年から着工された古平小学校の初年度工事費八百万円（二百坪）に相当する金額です。

その後高齢化社会とともに、国保は国民福祉の中心としてますます重要なものとなってきました。しかしそれと同時に、運営をしている各市町村はもちろん、国においてもその財源の確保に苦悩しているのが実情ですが、だからといって、住民の保険料を安易に値上げすることもできません。

平成六年度、古平町での一人当たり平均保険料は年額十五万四千七百円で、同じく医療費は三十七万六千五百二円となっています。保険料の納入率は高くなつて来ていますが、それでも昨年度は九十一%でした。